

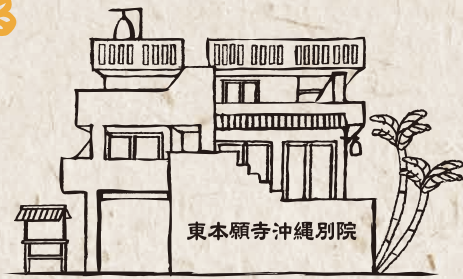
ハイサイ沖縄

7

Jul. | 2022
沖縄開教本部通信
vol.100

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

- 親鸞・一人になることのできる宗教 玉光 順正
- 沖縄はいま! 沖縄「復帰」五十周年
 - 沖縄県「新たな建議書」を政府・国会に提出
 - コラム 「プロバガンダ」西田 和正



親鸞・一人になることのできる宗教

玉光 順正 (元教学研究所有長)

劫濁のときうつるには
有情ようやく身小なり
五濁悪邪まさるゆえ
毒蛇悪龍のごとくなり

(正像末和讃 501頁)

私は此の世へ人間として 生まれてきたのだという感覚。そして新鮮さが失われてくると 人間はだんだん小さくなってしまふ。生きるという感動を失った人間は すべてのものが白い闇 漂白された知識に包まれてしまふ。そして人間の生きること全体が お互いに自分自身を傷つけ 他者を傷つけあつてしまふことになっていく。

「人 間がだんだん小さくなる」というのは、(宗祖の和讃の

現代語訳を思いついたので、70代に入ってからですが) それ以降もどんどん進行しているようにも思える。新型コロナウイルスの出現、ロシアのウクライナ侵攻等によって、いよいよ人間の矮小化はあらゆる範疇に渡って進んで

きているように思われる。

と同時に、それらのことと宗教とは深い関係がある、というより、宗教というものが無くなくなってきたと言つていいのかもしれない。つまり親鸞の「浄土の真宗」という言葉が表しているように、清浄さと真実というような概念は、かつてはどこか人間にとつて「宗教心」として、一番大事にしなければならぬことだと考えられていたのではないだろうか。私たちの日常生活の中でもそうだとすることを、蓮如は「ねてもさめても称名念仏すべきものなり」と言つているのである。

しかし、今の世の中、私と他者との関係性が、どこか変わり、自分にとって、損か得か、都合がいいか悪いか等が判断の中心になってしまったのだろうか、まさにこの和讃「有情ようやく身小なり」に、いよいよ言い当てられてしまつている。

何故こんなことになってしまったのか、問われているのは私たちの宗教心だと考える。宗教という言葉、概念そのものもグチャグチャなので何を今さ



辺野古に土砂を投入する船

らと思われるかもしれない。それは戦前、戦中、戦後、そして今の日本の宗教界の状況からも当然とも言える。しかし、私は今こそ自己自身の宗教心の出番だと思ふ。

その宗教心を見事に言い当てて下さつたのが、知花昌一(読谷・何我寺)さんのこの言葉である。

「僧侶になつてよかつたと思うことは何でしょうか」と問われて「ひとりになることができました。みんなにならず、ひとりになる。ひとりになるとは、自立した人間になることです。みんながひとりになれば、つながっていく。自立した人間同士は通じ合うから、孤独ではありません」(朝日新聞21・8・18)と。私たちも、一人になって、沖縄の本土復帰50年を、沖縄の同朋の願いを、確認するときである。

沖縄県 『新たな建議書』を 政府・国会に提出

1972年の本土「復帰」50周年を前に、玉城沖縄県知事は「平和で豊かな沖縄の実現に向けた新たな建議書」を公開した。この内容について当別院の総代より次のような要望をいただいた。

「真宗大谷派の宗議会・参

議会は1995年に不戦決議、そして2015年の非戦決議では沖縄の苦しみに言及しておられます。

今回の『新たな建議書』は①復帰時における沖縄と「復帰措置に関する建議書」②本土復帰後50年の振り返り③いまだ残る課題④沖縄の未来に向かつて⑤平和で豊かな沖縄の実現に向けた新たな建議、という構成で、その内容は沖縄県民の悲願の成就のみならず、日本の在り方に関

する課題と方向性を示唆する内容ともなっております。そして、沖縄の「万国津梁（ばんこくしんりょう）」の理念と「国豊民安 兵戈無用の願いに合致するものと思われまます。しかしこの件に関する本土での報道は少なく、関心は大変薄いものと思われまます。どうか課題の共有を」との要望。

この「建議書」は沖縄県のHPまた東本願寺沖繩別院のHPでも紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

【沖縄はいま！】 沖縄「復帰」50周年

沖縄が一九七二年に日本へ「復帰」して今年で五十年となった。復帰の日の五月十五日の前日には県内外から約千人が参加して平和行進を



琉球新報 5月15日付

行った。降りしきる雨の中、五十年前の基地が残る日本「復帰」に抗議した状況に思いをはせながら歩き、沿道では住民が沿道で励まし見守る姿もあった。

十五日には政府が主催する「沖縄復帰50周年記念式典」が沖縄と東京の二か所を中継でつなぎ開かれた。玉城県知事は「県民は過重な米軍基地負担を強いられたい」と訴える一方、岸田首相は「日米同盟の抑止力を維持しつつ基地負担軽減を着実

に積みあげる」と従来通りの考えを示した。復帰から半世紀、平等な安全保障を求めてきた沖縄側の訴えは本土に響かず、基地問題は「沖縄だけの問題」と捉えられている現実がある。

式典会場付近では、辺野古新基地建設の是非を問う県民投票を主導した元山仁士郎さんがハンガーストラйкиをして「基地のない東京の中心では当たり前とされる生活が、沖縄でも送れる環境をつくりたい」と思いを語った。

ーコラムー 「プロバガンダ」

近年、大変多くの外来語が報道番組やインターネットで使われているのを目にする。例えば「ガバナンス」「コンセンサス」「コンプライアンス」など、挙げればきりが無いが、今さら意味を聞くのもと思ひ、ひとりネットで調べているのは自分だけだろうか。

「プロバガンダ」という言葉もそのひとつで、「ウィキペディア」には、「特定の思想・世論・意識・行動へ誘導する意図を持った行為のこと」とある。それが今もつとも聞かれるのは、他国領土への侵攻に対する報道の中であろう。侵攻された国の中では言葉では言い表せないほどの惨劇が行われているのに、侵攻した国の中ではプロバガンダによってこれは平和的な軍事行動であるとされ、それを正義と信じて疑わない人もいる。

ただ、プロバガンダはどちらの国も行っているものであるだろうし、何が真実なのかは私にはわからない。しかし、目に映る悲痛な叫びをあげる人や、泣きじゃくる子供、命令に背けない少年兵の姿は事実、現実であろう。そこにある悲しみだけは心に突き刺さってくる。それはもちろん今回の件だけではなく、日々世界中でおこっていることだ。

言葉巧みにもっともらしいことを言い、人の頭に刷り込ませ、あたかもそれが真実かのように思わせる。私たちも、そこにある悲しみから目を逸らせられてはいないだろうか。「抑止力」「辺野古唯一」と言つて。

沖縄開教本部駐在教導 西田 和正